歴史地理学 175 30～42 1995.9

金中都の空間構成
—外郭をめぐって—

渡 辺 秀 一

I．はじめに
II．中都城周をめぐる問題点
III．金中都の外郭
(1) 中都外郭の位置
(2) 中都外郭区の土地利用
IV．外郭造営の目的
V．中都から大都へ—結びにかえて—

I．はじめに

中都は，1153年（貞元元年）に金・海陵王が上京会寧府にかわる新たな都城として遼南京旧地（現，北京市街南西部分。図1）に建設し，1214年（貞祐2年）に宣宗が開封に遷都するまでの約60年間金国の都城であった[1]。この金中都についての日本研究者の関心は一般的に低く，第二次世界大戦以前に那波利貞[2]・田村実造[3]・小野勝年[4]の論考があったが，その後はなに一つ進展していない。また中国研究者をみても，1930年代から1950年代にかけて朱偰[5]，閻文儒の論考があった以外に成果は乏しく，1980年代に王璞子[7]，于杰・于光度[8]らの論文・著作が公にされたにすぎない。

こうした中都研究のたち遅れは，文献史料の著しい不足や考古学調査の遅れからその実態把握がきわめて困難であることが大きな要因になっている。そして，その根底にまたその結果として中国都城史における金中都の重要性が十分に認識されていないことをつけ加えることができる。北京に関する著作・論文は多い。しかし，その多くが大都と『周礼』や宋都開封との関係に多くの言を費やすことはあっても，中都を大都以前に存在した都市として略述するにとどまり，大都と中都の構造的関連性[9),10),11),12)]などにふれないのは，その端的なあらわれである。

しかし，大都は，フビライが造営した新都（大都北城）だけでなく，北城から約500mの距離を隔てた旧中都の南城をあわせた二城から構成されている。大都北域は特異な構造をもつことで知られ，歴史地理学をはじめとする関連諸科学の研究対象となってきた。しかし，北城の構造的特色から大都の全体構造を考察することは困難であり，研究視野から南城を欠いた大都研究は大都の全体構造の解明をみずから閉ざすことにも等しいことだと思われる。大都の全体構造を明らかにするためには，なによりも大都南城とその前身である中都の実態把握を進めることが肝要なのである。

大都南城の前身である中都に関する考察は稀少であるが，それでもその構造は先学によって明らかにされつつある[13]。とはいえ，なお中都の全体像は明らかではない。これまでの中都研究は内・外城の復原的研究が中心であり，中都外郭に関する十分な論議を欠いてきたためである。そこで本稿では中都外郭をめぐる過去の議論を整理し，外郭の復原と土地利用状況の検討を通して，全中都の空間構成上の特色を明らかにしていく。

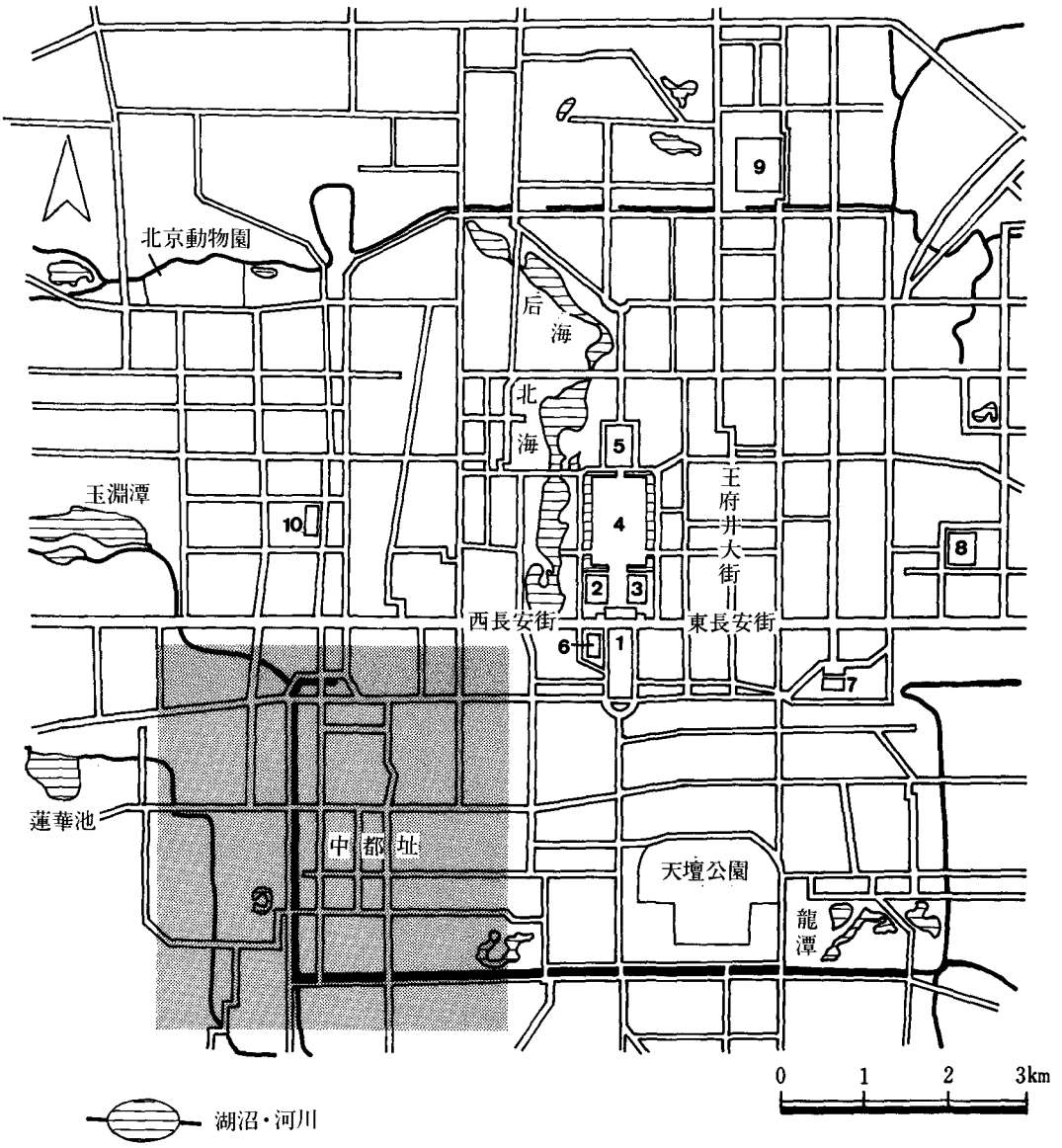

図1　北京市街と中都址

1．天安門広場　2．中山公園　3．労働人民文化宮　4．故宮博物院　5．景山
6．人民大会堂　7．北京駅　8．日壇公園　9．地壇公園　10．月壇公園

II．中都城周をめぐる問題点

中都の城周は正史である『金史』に記録がなく，中都の実態が不明であったこともてつだって，これまで30里説，33(35)里説，75里説[14]など様々な考え方があった。30里説は王璞子が『明太祖実録』に載せる明初の大都南城の実測値5,328丈がおよそ29里半に相当することを根拠に主張した[15]もので，愛宕元もこの説にしたがっている[16]。また，33(35)里説は戦後なお残存していた土城址の観察に基づき中都の復原を試みた閻文儒がその報告の中で主張したものである[17]。それによれば，旧中都の土城址は東城壁4,325

m（8里975尺），西城壁4,087m（8里260尺），北城壁4,486m（8里1,457尺），そして南城壁が4,065m（8里195尺）で，その全周は16,963m（33里1,027尺，約5,600丈）になる。金・海陵王の中都は周27里の宋・燕山府の東・西・南の三面を拡張したもので[18]，「75里」を「35里」の誤りとすれば大きな矛盾を生じないと述べている。近年の中国研究者の多くはこの説にしたがっており，中国研究者の間では33(35)里説がほぼ定着しているといえよう[19]。

一方，75里説は宇文懋昭（宋）撰『大金國志』に始まり，熊夢祥（元）『析津志』，于敏中等編（清）『日下舊聞考』，呉長元（清）『宸垣識略』，周家楣・繆荃孫編（清）『光緒順天府志』など後代の地誌に採用されてきたものである。30里説および33(35)里説が実測値に基づいているのとは対照的に，客観的根拠を何一つ提示できていない。しかし，75里説は30里説や33(35)里説のように中都外城の城周を指したものではなく，外城をさらに囲む外郭の城周として考えられてきたことを無視してはならないだろう。30里説や33(35)里説がどれほど精緻な調査に基づくものであってもそれは外城の城周でしかなく，外郭に関する調査を行うことなしにその調査結果によって外郭75里説を誤謬として否定することはできない。

外郭土城址が全く残存せず，考古学的調査も行われていない現状では，外郭に関する考察は文献史料に頼るほかないが，外郭の存在に否定的な今日の趨勢とは異なり，諸史料はそれを肯定的に伝えている。その一つは75里説をとる『析津志』である。元大都の都市誌である『析津志』の記述内容は元末期の状況であり[20]，元末まで旧中都が大都南城として30里の城周を維持していたことは王璞子が論拠とした明初の実測によっても明らかである。その南城が存在していてなお『析津志』が75里説を採用したのは，何か根拠があったに違いない。さらに金朝と国境を接し，緊張状態にあった宋人の記録の中に中都外郭の存在を示す信頼性の高い史料が存在する。以下に示す楼鑰（ロウヤク）（宋）『北行日録』（1169年）の一節がそれである。

四更初，東行六十里，過蘆溝河至燕山城外，
去燕賓館百余歩，使副上馬三節具衣冠，
随入館中亭子，（中略）入城，道旁無居民，
城濠外土岸高厚，夾道植柳甚整。行約五里，
経端礼門外方至南門。過城濠，上大石橋，
入第一楼，（中略）次入豊宜門。

これによれば，楼鑰は蘆溝河を渡り，「燕山城外」（中都城外）の燕賓館を過ぎて「入城」し，端礼門外から城濠を経て，南門（豊宜門）に到達している。城濠を経て豊宜門に入る以前に「入城」というのであるから，端礼門・豊宜門がある中都外城のさらに外側に城壁がめぐらされていたのは明らかであろう。

また，『明典彙』（『日下旧聞考』巻38所収）にも中都外郭の存在を示すものがある。明代北京は1420～1425年，1441～1643年の二度にわたって明朝の都城となった。明代北京は，1371年（洪武4年）に旧大都北部を放棄し，1419年（永楽17年）には南部を拡張したものの，1553年までその規模は大都を下回る周40里にすぎなかった。この間，北京城外の居住者が増加し，1553年（嘉靖32年）になってその安全確保のための外城建設が実施されたが，『明典彙』に載せる史料はその外城建設に先立って北京四郊の土城址を実地踏査した朱伯辰の奏上の一節である。

城外居民繁夥，不宜無以圉之。臣嘗履行四
郊，咸有土城故址，環繞如規，周可百二十
餘里。

これによれば，1553年以前の北京城外には規則性のある土城址が120里＝67,176m（明里＝559.8m）余り残存していたことになる。その土城址の中には1371年に放棄した旧大都北部，さらに旧中都の土城址が含まれていたはずである。図2は外城建設以前の明代北京と旧大都・旧中都の位置関係を示したものであるが，「北五里」の放棄[21]された旧大都城壁は北およそ6,700m，東およそ2,870m，西およそ3,650[22]mで，明里に換算するとその長さの合計は約23.6里になる。また，旧中都内城址は『北京歴代地図集[23]』

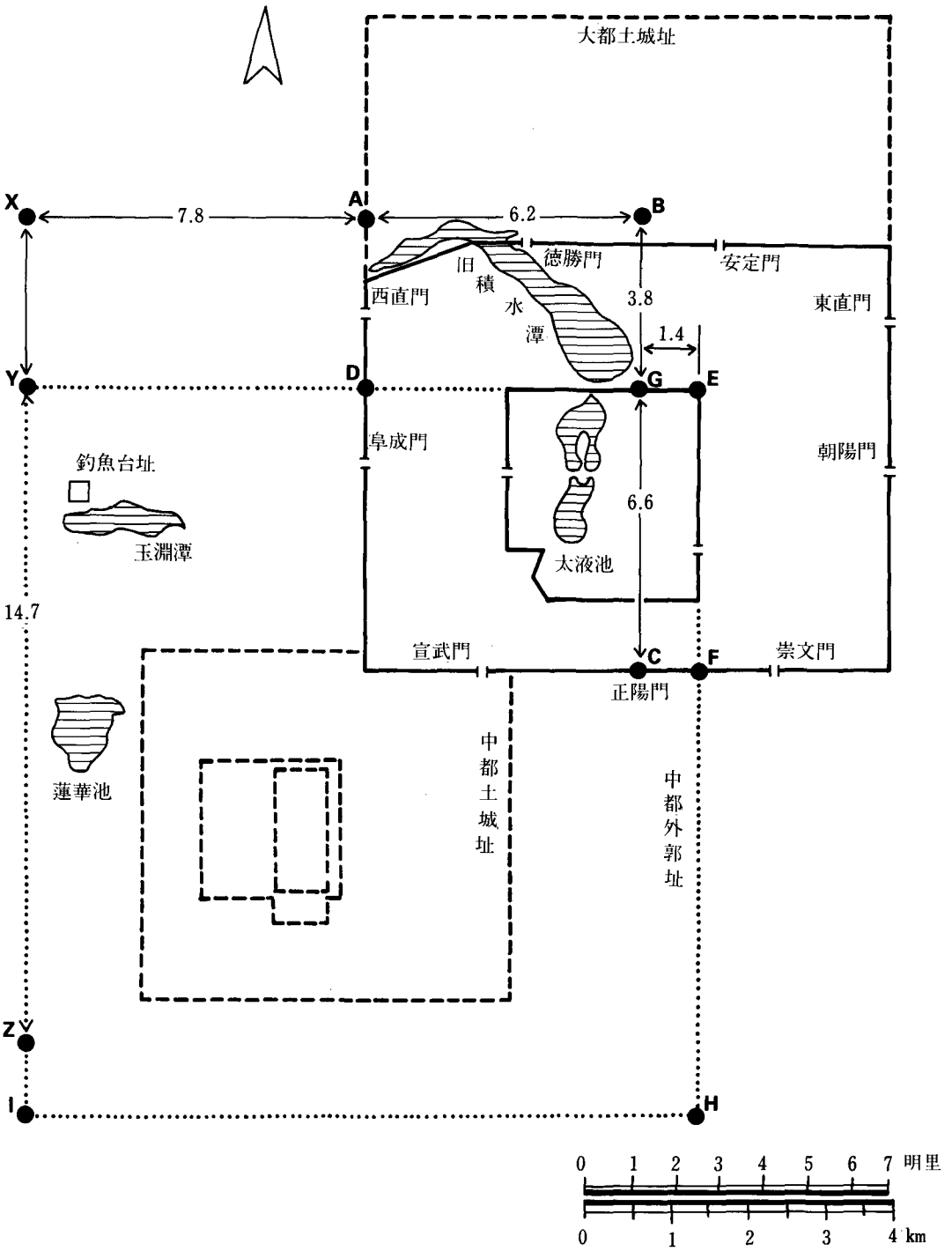

図２　明前期北京城と城外址

注１）中都内城土城址は于杰・于光度『金中都』による。

注２）図中の数値の単位は明里（１里＝559.8m）である。

所収の復原図をもとに計測した長さが17里，于杰らの『金中都』所収の復原図[24]をもとに計測すると21.5里で，1419年の北京城南部の拡張による破却分を除いた外城址26.5里を合わせた旧中都の土城址は最短で43.5里，最長で48里となる。これと旧大都北部を合わせた土城址の長さは67.1～71.6里で，朱伯辰の調査結果との差は48.4～52.9里にもなる。周40里[25]といわれた当時の北京を上回る土城址の規模から考えて，それは旧中都外郭の土城址であったと考えるよりほかにないのである。

III．金中都の外郭

(1) 中都外郭の位置

于杰・于光度は，外郭の存在に否定的な見解が大勢を占める中で『北行日録』・『大金國史』の記述にしたがって外郭の存在を主張している。しかし，文献的にそれが認められることを指摘するのみで，その位置など外郭に関する具体的な言及は行っていない[26]。中都外郭の位置についての推論を最初に試みたのは，管見の限りでは呉長元（清）である。呉長元は『宸垣識略』のなかで次のように述べている。中都外郭は今城（清代北京）の南西にあり周75里，元大都はその東北にあって周60里，両都城の城周はあわせて135里となるが，朱伯辰の調査結果はそれより15里ほど短い。そは中都外郭と大都が交会したためであり，三面で交会したとすれば，南北５里にわたって中都外郭と元大都とが重なり合っていたはずである[27]，と。呉長元は中都外郭と大都が交会すると考え，概略的な位置関係を示しているが，その推論は合理性を欠き，具体性に欠ける点は否めない。そこで，楼鑰・朱伯辰の記録と大都・中都外郭の交会の三点を手がかりに外郭の具体的な位置について検討していく。

図３は中華民国２年北京陸軍測量局による２万５千分の１地形図「馬家舗」の一部で，旧中都西部分を示したものである。楼鑰が通過した道筋を正確にたどることは困難だが，この図上で端礼門址からのびる道路に沿って西の蘆溝橋方面へ５里（2,745m）の距離をとると，中都故城西南「西管頭」の西に到達する。旧中都西土城址と「西管頭」西地点までには西土城址と平行に南北に走る小路が幾本か確認できる。この南北路を中都と直ちに関係づけることはできないが，人為的と思える直線上の小路は城壁など人工的構築物との関連を想像させる。楼鑰（宋）『北行日録』にしたがえば，「西管頭」西地点付近に外郭門の一つがあったはずで，外郭西城壁は「西管頭」西から蓮花池の西にあったと考えてよかろう。

また，朱伯辰の調査によれば，中都外郭遺址と思われる50里前後の土城址が明代北京城外に残存していた。これには大都北城・明代北京と交会し，1553年（嘉靖32年）までに破却された外郭部分は含まれておらず，『大金國志』のいう75里と城外土城址50里（明里）の差はその交会部分の長さを示すことになる。そこで問題になるのは75里の実長である。距離の基準となる金・元代の里制・造営制には三つの考え方がある。第一は１尺＝0.305m，１里＝549m（５尺＝１歩，360歩＝１里）とするもので，閻文儒が宋鉅鹿城出土の木尺を基準に示した里制である[28]。第二は１尺＝0.308m，１里＝554.4mとするもので，趙正之が大都の造営尺として示した[29]。第三は『金史』食貨志や陶宗儀（元）『輟耕録』，王禎（元）『農書』の記事から５尺＝１歩，240歩＝１里の造営制を主張する王璞子の考え方である[30]。王璞子は１尺の長さを明記していないが，第一の里制にしたがえば１里＝366m，第二の造営制によれば１里＝369.6mになる。ところが，周60里といわれた大都の城周（実測値28.6km[31]）とこれらの里制・造営制とは一致しない。大都の城周は，第一の里制で32.94km，第二の造営制で33.264km，第三の造営制では21.96kmあるいは22.176kmとなるのである。これは「九里三十歩[32]」と記録された中都宮城の城周についても同様である。中都宮城の実測は行われていないが，前出の『北京歴史地図集』の「金中都」図による図上計測ではおよそ4,200m，『金中都』の「中都図」による図上計測ではおよ

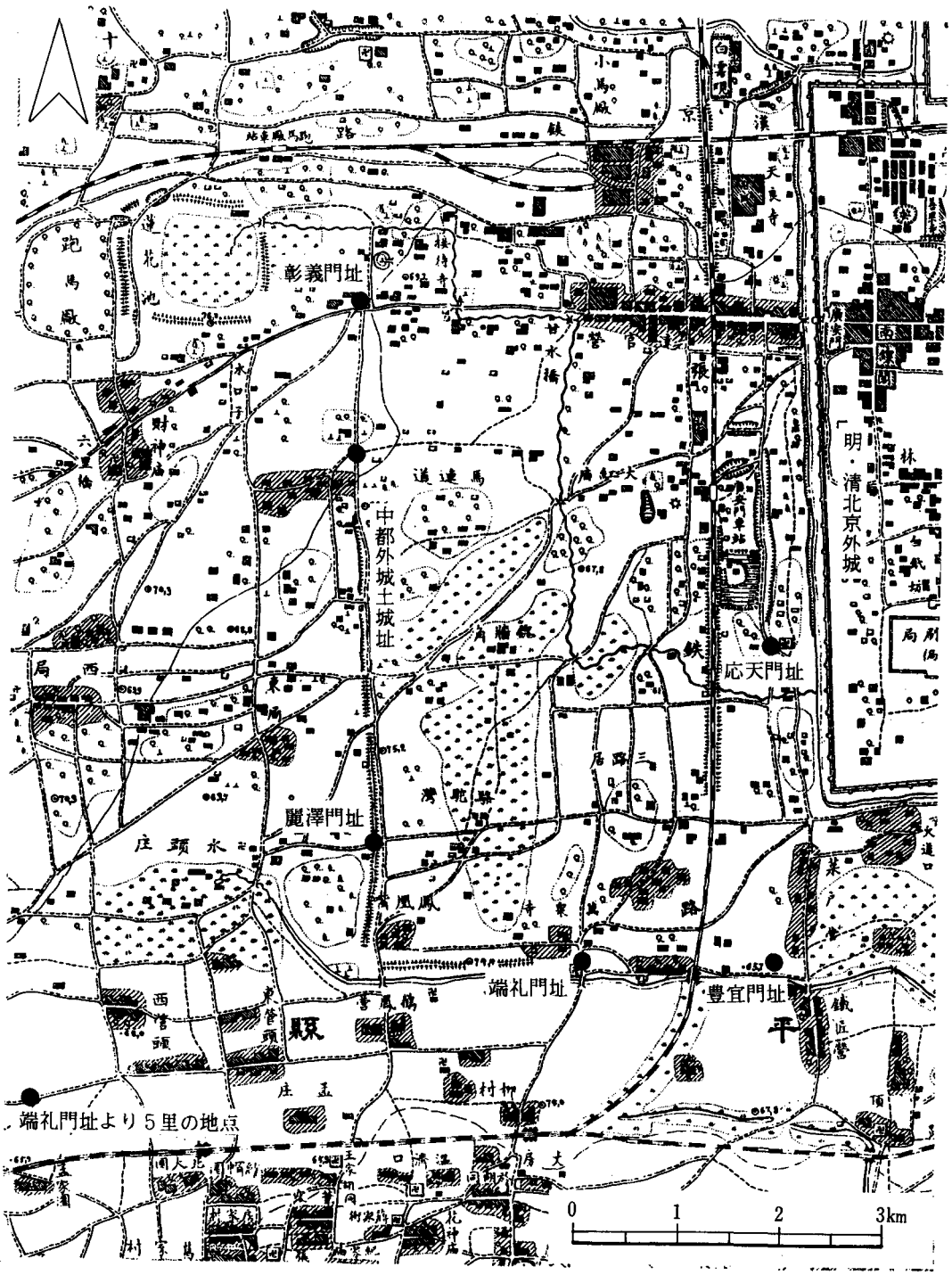

図３　北京南西「馬家舗」地形図

そ4,500mになる。しかし,第一の里制によると4,950m,第二の造営制によると5,036m,第三の造営制によると3,340mあるいは3,373mである。大都の城周にしろ,中都宮城の城周にしろ,これらの里制・造営里と計測値の間には大きな誤差が生じるのである。これに対して,中都宮城の図上測定の中間値から計算される1里は約479mで,大都城周実測値28.6kmから算出される1里約477mと極めて近い値になる。そこで以下では1里の長さを暫定的に両者の中間値478mとする。これに基づけば中都外郭は35,850m,明里64里で,大都・明代北京の交会による破却部分は11.1〜15.6里となる。

以上の結果を踏まえ,外郭の外形を矩形と仮定して,外郭の位置の推定の必要な諸条件を整理すると,以下のようになる。

(ア) 外郭の西は「西管頭」(図2,Z地点)の西を南北に伸びる小路付近で,園遊地となっていた蓮花池・釣魚台などの水域を囲い込んでいる。

(イ) 外郭の北・東の一部は明北京城内を11〜16里の長さで「冂」型にのびる。

(ウ) 外郭の北は,積水潭・太液池といった広域の水域にはかからない。

(エ) 外郭の東は,積水潭・太液池にかからず,また中都外郭以東に位置する。

(オ) 外郭の長さは明里にして64里である。

(イ)について,(ウ)・(エ)の条件を考慮した上で想定できる外郭は以下の3通りである(図2)。

①A−B−Cライン,全長16.6明里。C地点は明代北京南面の正陽門にあたる。

②D−E−Fライン。全長14.2明里で,E地点は明代北京内城(大都内城)北東角に当たる。

③D−G−Cライン。全長12.8明里で,G地点は明代北京内城北門の北安門(大都内城北門の厚載紅門)に当たる。

①〜③のいずれであるにせよ,外郭はZ地点を通過し,64明里以内でなければならない。そこで,Z地点を南西角と仮定して外郭の最小規模を算出すると,①65.0明里,②60.2明里,③57.4明里となり,①は外郭規模の点で適合しない。②であれば東西15.4明里(8.6km),南北16.7明里(9.3km),③であれば東西14.0明里(7.8km),南北18.0明里(10.1km)という規模になる。②・③のどちらが適切なのかを判断できる確かな材料は今のところない。ただ,③は南北にかなり長い矩形となり,中都とのバランスを著しく欠いている。したがって,②に基づいてY−E−H−Iに外郭を想定するのが最も妥当である。

(2) 中都外郭区の土地利用

75里の外郭の造営によって新たに囲い込まれた地域(以下,外郭区と仮呼する)の面積はおよそ58km²で,中都の二倍半をこえる面積になる。その外郭区の土地利用に関する記録を諸史料から抜き出し,整理したものが表1である。外郭の存在を直接的に示す史料は1169年(大定9年)の楼鑰(ロウヤク)『北行日録』が最初で,遼・南京(938〜1122年),宋・燕山府(1123〜1125年)の時代,さらに中都を建設した海陵王期にもそうした史料を見いだすことはできない。しかし,外郭区の利用が開始されたのが1164年(大定4年)の都門外の「植柳」を最初として,世宗以降であったことは表1から明らかであり,1169年の楼鑰の訪金が外郭造営から間もない時期であったことも外郭区における市街地化の進展状況から考えてほぼ間違いがない。

外郭区は1169年当時「道旁無居民」という状況でしかなかったが,1211年(大安3年)には「南柳街」と呼ばれる街区が形成されていた。この「南柳街」は外郭門の一つ「南順門」に通じ,「南順門」は蘆溝河をわたって中都南西の良郷に至るルートに位置[33]している。同ルートは「使客商旅之要路[34]」とも表現され,中都にとっては重要な経済的幹線であったと同時に,良郷・蘆溝河を経由して楼鑰など宋使が中都と往来するルートであった。したがって,「南順門」とは楼鑰が「入城」と記した「西管頭」西の外郭門を指しており,50年の時を隔てて同じルートに沿っ

表1　中都外郭の土地利用状況

	設置年および内容……所在地			出　典
A．祭　祀	ア	（年不詳）	南郊壇……豊宜門外	（1）
	イ	（年不詳）	北郊方丘……通玄門外	（1）
	ウ	（年不詳）	朝日壇……施仁門外之東南	（1）
	エ	（年不詳）	夕月壇……彰義門外之西北	（1）
	オ	（大定11年）	拝郊台……府西南七里	（4）
	カ	（大定11年）	郊天台……京城之南五里	（3）
	キ	（明昌5年）	風師壇……景豊（景風）門外東南	（1）
	ク	（明昌5年）	雨師壇……端礼門外西南	（1）
	ケ	（明昌6年）	高禖壇……景風門外東南端、與圜丘東西相望	（1）
B．寺　観	1	（唐）	十方禅院……西直門小街観音寺胡同	（5）
	2	（唐）	萬福寺……右安門外草橋北	（5）
	3	（貞観間）	給孤寺……虎坊橋東、西猪市大街	（5）
	4	（貞観22年）	鷲峯寺……城隍廟南鷲峯寺街	（5）
	5	（開元間）	開元寺……崇教南坊北新橋路西	（5）
	6	（遼）	永泰寺……薬王廟西	（5）
	7	（遼）	朝陽庵……阜成門内玉帯胡同	（6）
	8	（寿昌2年）	白塔寺……河漕西坊阜成門街北	（5）
	9	（遼金間）	延寿寺……西河沿五斗斎西南延寿寺街	（5）
	10	（宋）	翊教寺……河漕西坊翊教寺胡同	（5）
	11	（金）	広済寺……阜成門大街帝王廟東	（5）
	12	（大定間）	観音寺……玉河郷池水村	（5）
	13	（大定間）	弥陀寺……霍家橋、左安門内崗子路	（6）
	14	（章宗代）	双塔寺……西長安街	（5）
	15	（年不詳）	魏村社……三転橋、天壇紅橋法華寺	（7）
	16	（年不詳）	地蔵寺……阜城門外西二里許	（6）
	17	（年不詳）	詔慶寺……施仁門外、駐蹕寺西	（3）
	18	（年不詳）	神游観……会城門外近西	（3）
	19	（年不詳）	天寧寺……宣耀門外	（3）
	20	（年不詳）	鳳林寺……彰義門外、雪堂西	（3）
	21	（年不詳）	昆吾公廟……宣耀門外官場南	（3）
C．市街等	1	（大定4年）	「命都門外夾道重行植柳、各百里」	（1）
	2	（大定19年）	大寧宮……瓊華島	（1）
	3	（承安4年）	太学……京城之南	（1）
	4	（大安3年）	「大軍攻南順門、天驥設拒馬于南柳街」	（1）
	5	（至元8年）	「前築都城徙居民三百八十二戸」	（2）

出典　(1)『金史』　(2)『元史』　(3)元・熊夢祥『析津志』　(4)『明一統志』　(5)清・呉長元『宸垣識略』　(6)『光緒順天府志』　(7)『燕都叢考』

注1）詔慶寺の項によると，詔慶寺は施仁門外で駐蹕寺の西であるから，駐蹕寺も施仁門外にあったことになる。しかし，駐蹕寺は寺地の移動を繰り返しており，金代には中都外城内にあったと考えられている。

注2）表のA．祭祀ア～ケおよびB．寺観1～21は図4の記号・番号に一致している。

た地域の市街状況は，無住の空閑地から家屋が密集する市街地へと大きく変貌していたのである。

しかし，外郭区全域で市街地化が進行したとは考てられない。そのことを示すのが1271年(至元８年)の『元史』世祖紀の記事である。これによれば，51.4㎢の大都北城の建設によって移転したのは382戸で，仮にそのすべてが中都外郭区にあったとしても１㎢あたり24戸にすぎない。したがって，太学が建設され，幹線ルートが通じていた南部を除いては，外郭区はほとんど市街地化することがなかったと判断できるのである。

その一方で目立つのが，祭祀施設・寺観および離宮・園遊地である。中都における南・北郊祀制は海陵王の遷都後まもなくから始まるとされるが，中都

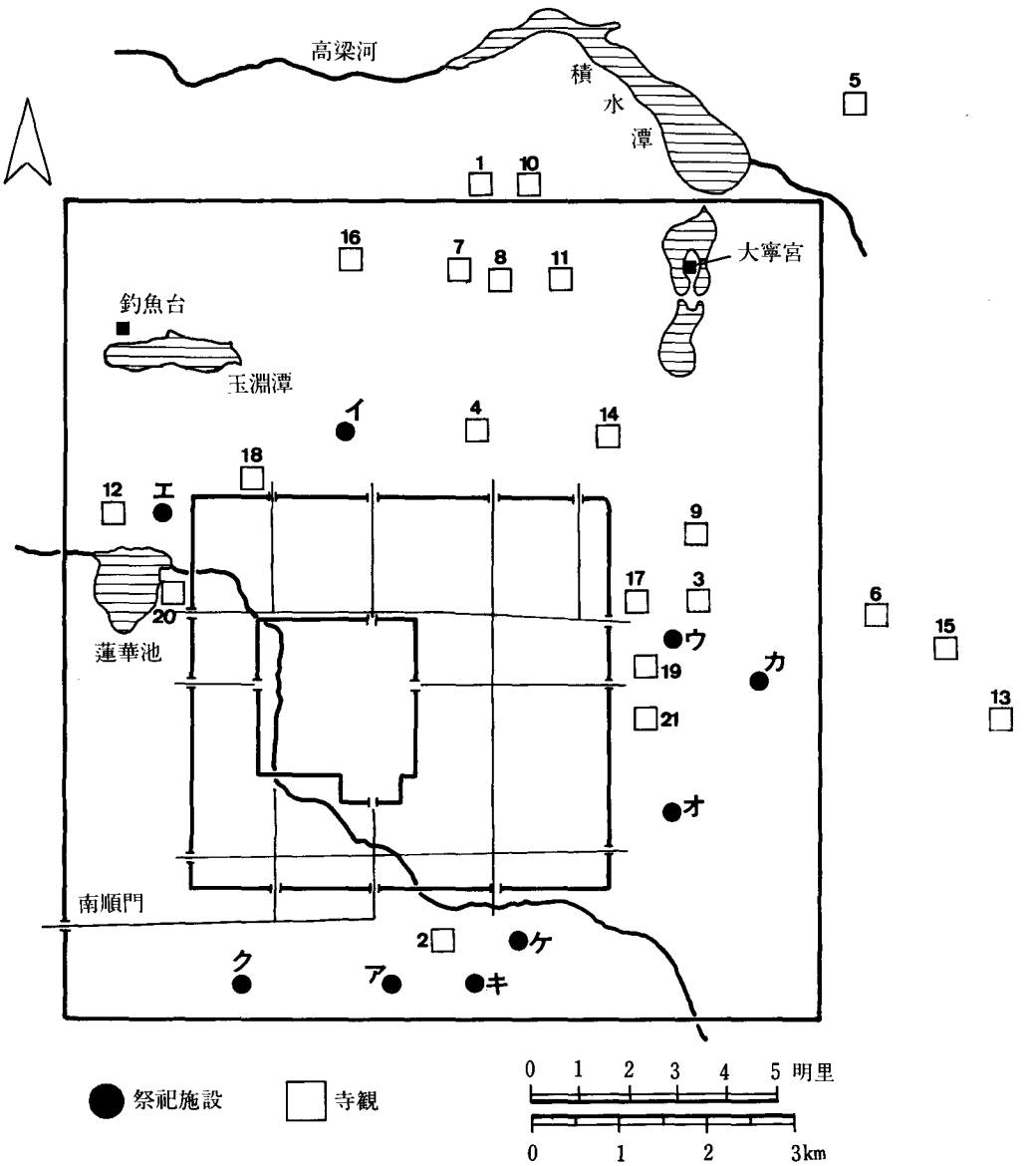

図４　中都外郭の郊祀施設・寺観

四郊の祭祀が本格的に開始されたのは1171年のこと[35]である。豊宜門外南東の南郊壇以下，女真族の「拝天」の習俗に由来する祭祀施設が外郭区に位置している（図4）。また，于杰・于光度は外郭区内に分布する寺院・道観を14例あげている[36]が，唐～金間に創建された寺院・道観は諸史料によると21例（表1，ただし香山地区を除く）が確認できる。21伽藍の所在地点には検討の余地を残すものもあるが，数例を除けばほぼその位置は明らかになっている（図4）。市街地化が進んだ南部には萬福寺の1例があるだけで，寺院・道観は明らかに北部・東部にかたよった分布を示す。21の寺観の中には唐代に創建された古刹も含まれており，中都造営以前から太液池・積水潭以西の中都北東部は寺院区の様相を呈していた。この中都北東部にはこのほか蓮花池・釣魚台・積水潭・太液池などの水域が散在し，4月から7・8月にかけて世宗がしばしば行幸し，章宗（在位1189～1208）が毎年同期に滞在するのを常とした大寧宮（のちに，壽寧宮，壽安宮，萬寧宮と改称）が建設されている。釣魚台は「金章宗於春月釣魚之地[37]」といわれ，これらの水域は佳景遊賞の地であった。寺観も宗教施設というだけでなく行楽の対象でもあり，南部を除く外郭区は行楽的な空間としての利用が卓越していたのである。

以上のように，中都外郭は城外市街地の拡大から新たに造営された宋の旧都開封や明代北京の囲郭とは明らかに造営の経緯が異なり，外郭区も将来の市街地化を念頭に置いて囲い込まれたものではない。また，外郭区には多数の宗教的施設が分布し，行楽的な利用も行われていたが，そうした現実的な利用目的のための空間であったならば，外郭の造営は必要なかろう。結局，外郭は新たな空間を囲いこみ，その空間を利用することに目的があったのではなく，外郭によって他と区別された新たな空間をつくりだし，それが存在することに意味があったと考えざるをえない。そして，その新空間すなわち外郭区は，中都住民にとってではなく，皇帝を頂点とする金朝の支配者層にとって必要な空間であったと考えられる。

IV．外郭造営の目的

中都はそれ自身で完成した都城であった。それにもかかわらず，外郭を造営し，中都を利用することにではなく存在することに意味がある外郭区で囲繞する必要があったのはなぜであろうか。すでに述べたように外郭区の利用が本格的に開始されたのは世宗期以降のことであるが，その世宗は南宋の併合と中国的な専制的中央集権国家の建設をめざして中都に遷都した海陵王に比べて懐旧的で，世宗自身が「上京風物朕自楽之，毎奏遷都，輒用感愴。祖宗舊邦，不忍捨去，萬歳之後，當置朕于太祖之側，卿等無忘朕言[38]。」と述懐しているほか，中国進出とともに失われていく女真文化の維持にも腐心していた[39]。金朝の政治的・経済的中心はすでに中国華北に移動しており，そうした情勢の中で中都に定都した世宗が女真旧俗重視の意志をもっていたことは，中都外郭の建設の意味を考える上でたいへん示唆的である。

その世宗期に外郭内で進んだ事業は大きく三つに分けられる。一つは前章で述べた郊祀施設の建設であり，他の二つは「植柳」による外郭区の景観整備と大寧宮の造営である。「植柳」は中都内城の応天門に至る馳道でも行われていたが[40]，積極的に市街地化する意志もない外郭区の景観整備には別に意図があったと考えられる。この「植柳」による景観整備は中都が最初ではなく，すでに旧都上京会寧府においてみられる。上京で「植柳」が行われていたことを記した史料は多く[41]，『大金國志』巻10熙宗孝成皇帝二にも「金主所独享者，惟一殿，名曰乾元。所居四外栽柳行，以作禁圍而已」と記録されている。中都内城の「植柳」は上京宮城（皇帝寨）の四周で行われていた「植柳」を明らかに倣ったものであり，外郭区でも同様の意図で実施されたと考えられよう。ただ外郭区は，郊祀の場である以上，明らかに「郊」である。したがって，外郭区の「植柳」は中都全体

を，上京宮城ではなく，上京そのものになぞらえられたと考えるのが妥当である。

また，大寧宮の造営とそこへの世宗・章宗の頻繁な行幸は，「春水秋山」とよばれる領内巡幸そのものである。傅楽煥によれば「春水秋山」は遼朝に始まり，金朝では上京会寧府周辺の宿営地でこれを開始した熙宗期を第一期として，以後巡幸地の変遷によって四期に分けられる。中都へ遷都した海陵王および大寧宮を造営した世宗期は上京を中心とする「春水秋山」が完全に放棄された第二期に，次代の章宗期は第三期にあたり，巡幸地も南下して万寧宮（旧称，大寧宮）や中都南郊の建春宮，中都路東部の長春宮（光春宮[42]）など中都近郊にほぼ限られるようになっていた[43]。

このように，世宗・章宗期の外郭内の景観整備，離宮の造営とそこへの行幸は熙宗期の上京会寧府と極めて類似している。初期上京については，宋・許亢宗の『宣和乙巳奉使行程録』（1125年）に「一望平原曠野，間有居民數十家，星羅棋布，紛揉錯雑，不成倫次，更無城郭里巷，率皆背陰向陽，便于牧放，自在散居」と記され，また景愛によれば，皇帝・貴族と一般住民との居住地の区別はあったものの，坊里はなかった[44]。そうした上京を拡張しかつ城郭化して中国的な皇帝・貴族・一般住民の分居を定めたのが熙宗（在位1135～1149年）であるが[45]，城郭化が進んだ後も城外の景観は都城化以前に許亢宗が目にした牧地同様の状態と大きな変化はなかったものと推測される。楼鑰（ロウヤク）が「道旁無民居」といい，その後も市街地化が進まず，離宮と寺観を除けば「一望平原」の空間にも等しい状態にあった外郭区はそうした旧都上京の城外の景観とほとんどかわらないものである。「植柳」といい，大寧宮造営といい，それらは中国的秩序を受け入れながらも女真族の習俗を残していた熙宗期の旧都上京と城外の景観を再現することに他ならない。したがって，外郭区は女真族旧制へ回帰し，女真の旧俗を擬似的に体験するための空間として存在し，外郭はそうした空間を旧都を遠く離れた中国世界から切り離すための装置であったのである。

外郭で囲郭された空間全体を中都ととらえれば，中都は中国都城史上において希有の空間構成をもつ都城ということになる。こうした都城は，宮殿や高楼・府第邸宅が櫛比する都城を文化的伝統としてもち，かつ体験している楼鑰の目には奇異に映ったに違いない。「道旁無居民」の句には，中国的伝統と自身の体験に反した外郭区の光景に対する楼鑰の驚きが感じられる。翌1170年に中都を訪れた范成大（宋）は「入豊宜門，即外城門也」（『攬轡録（ランヒロク）』）とだけ記し，外郭に関する記録を一切残していない。豊宜門を外城門とし，それ以内を都城とする范成大にとってみれば城外である外郭区がもつ意味を理解することはおそらく困難なことであったろう。しかし，その外郭区も中都に本拠を定めた女真族にてってみれば彼ら自身の都城をつくりだすために必要な空間であった。楼論・范成大と女真族はともに外郭に囲郭された都城を経験しながら，文化を異にしてそれぞれに異なる都城として体験していたのである。

V．中都から大都へ―結びにかえて―

外郭は中都を中国系から女真系都城へと変質させる装置であったが，それがいつ，どのように消滅したのかはっきりせず，1215年からモンゴルの支配下に入り，フビライによる大都造営の過程で消滅したと推測されるだけである。外郭が消滅したといっても，それで旧中部の空間構成が中国都城の伝統的な空間構成に再編されたとはいい難い。フビライの新都（大都北城）造営は1267年（至元４年）～1285年（至元22年）にかけての約20年間を要し，この間に人口数で新都を上回る繁華な城外町の形成が進み，大都への到来者の宿泊施設・商館が設けられていたことが『東方見聞録』に記述されている。[46]城外町は大都北城を機能的に補完していたと考えられ，ここに北城と城外町の全体を大都としてとらえる必要が生まれるのである。マルコ・ポーロのいう城外町が

南城そのものなのか検討の余地が残されているが，北城が都城として完結しているとは考えられない以上，伝統的な中国都城の構造に照らし合わせた大都の考察には限界がある。敢えてそうした考察を進めるならば，范成大が自らの経験をもとに中都をとらえ，外郭の意味を理解できなかったのと同じ轍を踏むおそれがあろう。

そうした過誤に陥らないためにも，今後中都の構造の解明を一層進め，中都と大都の比較を通して両都城の構造的関連性を明らかにすることが必要である。そして，それは中都・大都の個別都市的な理解にとどまらず，両都城の中国都城史における適正な位置づけに多少なりとも寄与するものと思われる。

（立命館大学非常勤講師）

〔注〕

1）正確には1159年あるいは1160年から1161年にかけて中断がある。この間，海陵王は南宋の併合をもくろんで南京開封へ遷都している。

2）那波利貞（1928）：遼金南京，燕京故城疆域考，『高瀬博士還暦記念支那学論叢』，弘文堂所収。

3）田村実造（1938）：金の海陵王燕京遷都の意義，東洋史研究３－６。

4）小野勝平（1939）：遼金都城考，考古学論叢14輯。

5）朱偰(1936)：遼金燕京城郭宮苑図考，武大文哲季刊６－１。ただし，筆者未見。

6）閻文儒（1959）：『金中都』，文物1959年第９期，８～12頁。

7）王璞子(1984)：遼金燕京域坊宮殿述略，科技史文集第11輯，20―43頁。

8）于杰・于光度（1989）：『金中都』，北京出版社。

9）陳高華（佐竹靖彦訳）（1984）：『元の大都（中公新書731）』，中央公論社，20～38頁。

10）劉敦楨編（1990）：『中国古代建築史』，明文書局，265～267頁。

11）愛宕元（1991）：『中国の城郭都市』（中公新書1014），中央公論社，180～182頁。

12）前掲９）～11）の他に，以下の論考などをあげることができる。

陳正祥(1974)：北京的都市発展，香港中文大学中国文化研究所学報第７巻第１期，41～94頁。

中国建築史編写組編（1982）：『中国建築史』，中国建築工業出版社，49～50頁。

侯仁之(1982)：北京城　歴史発展之特点及其改造，歴史地理学第２輯，１～20頁。

北京大学歴史系北京史編写組（1984）：『北京史』，北京出版社，82～86頁。

また，邦文の論考・訳書には以下のものがある。

陳橋駅編著・馬安東訳（1990）：『中国の諸都市』大明堂，１～７頁。

張在元編著(1994)：『中国　都市と建築の歴史』鹿島出版会，23～42頁。

船越昭生（1985）：北京，藤岡謙二郎編『講座考古地理学３　歴史的都市』学生社所収，183～193頁。

13）前掲７）。前掲８），７～９９頁。

14）中部の城周に関する諸説にはこの他に，『金國南遷録』では90里，前掲10）では37里とする。『金國南遷録』の記事は筆者未見。また，前掲10）の37里説についてはその根拠が記されていない。

15）前掲７），29～30頁。

16）前掲11），179～180頁。

17）前掲８），９頁。

18）海陵王の中都改造は『元一統誌』などに「三里」あるいは「千歩」の拡張が行われたと記されている。しかし，王璞子は「三里」を「三面」の誤りとし，于杰らは「三里」の拡張は南面においてであるというなど，問題点が残っている。

19）たとえば，北京市文物研究所編（1990）：『北京考古四十年』，北京燕山出版社，160～162頁。

20）『析津志』の著者熊夢祥は元末期の人物と推定されているほか，順宗至正年間（1341～1367）創建の梓潼帝君廟（文昌宮）に関する記事を載せている。

21）『寰宇通志』（『日下舊聞考』京城総紀，引用）に「洪武初，改大都胸為北平府，縮其城之北五里，廃東西之北光熙，肅清二門，其九門俱仍舊。」とある。

22）侯仁之編（1988）：『北京歴史地国集』，北京出版社，27～28頁所収「元大都」復原図（1.5万分の１），同31～32頁所収「明北京城」復原図（2.75万分の１），徐苹芳編著（1968）：『明清北京城図』，

地図出版社所収「明北京城復原図」(1.2万分の1)による図上計測である。

23) 前掲22)，24頁所収「金中都」復原図（2.5万分の1)。

24) 前掲8)，「金中都城図」(3.7万分の1)。

25) 『日下舊聞考』京城総紀引用「工部志」。

26) 前掲8)，60～63頁。

27) 呉長元（清)：『宸垣識略』巻1建置。

28) 前掲6)，11頁。

29) 趙正之(1979)：元大都平面規劃復原的研究，科技史文集第2輯，26頁。

30) 前掲7)，22頁。

31) 中国科学院考古研究所・北京市文物管理処元大都考古隊「元大都的勘査和発掘」，考古1972年第1期，1972，20頁。

32) 宇文懋昭（宋)：『大金國志』巻33，燕京制度。

33) 『大金國志』巻24によれば，中部から開封へ遷都した宣宗は南順門より出て，涿州に到着した。良郷は都・涿州の中間で，中都まで60里である。また中都から30里，良郷との中間点が蘆溝河鋪である。

34) 『金史』河渠志，蘆溝河条。

35) 『金史』礼志，郊条。

36) 前掲8)，52～55頁。

37) 『析津志』古蹟条。

38) 『金史』世宗本紀，大定25年4月条。

39) 三上次男・神田信夫編（1989)：『東北アジアの民族と歴史』，山川出版社，232～235頁。

40) 宋・范成大の『攬轡録』に東西廊中馳道甚闊，両旁有溝，溝上植柳……馳道之北即端門十一間，曰応天之門」と記す。

41) 『大金國志』巻39，初興風土条や『金虜節要』(『三朝北盟会編』巻166，炎興下帙66）にも同様の記述がある。

42) 『金史』地理志によれば建春宮は大興府大興県，長春宮は灤州石城県にあった。建春宮址は北京市南苑と考えられ(前掲8)，108頁)，長春宮の所在地石城県は，譚其驤編『中国歴史地図集』によれば，河北省唐山市北東部である。

43) 傅楽煥(1984)：『遼史叢考』中華書局，98～100頁。「春水秋山」の「春水」は春の池沼で「捕鵝」を，「秋山」は秋の「射鹿」を目的とする巡幸を指している。

44) 景愛（1991)：『金上京』新華書店，13～66頁。

45) 前掲44)，21～22頁。

46) マルコ・ポーロ（愛宕松男訳)：『東方見聞録』(東洋文庫158，平凡社，1970)，208～209頁。